

ポートランド日本庭園のディレクターシステムが果たした役割・意義と国際交流の多面的効果

Role and Significance of the Garden Director System at the Portland Japanese Garden: Multidimensional Results from the Cultural Exchange.

土沼 隆雄* 内山 貞文** Stephen D.Bloom**

Takao DONUMA* Sadafumi UCHIYAMA** Stephen d.BLOOM**

1. はじめに

オレゴン日本庭園協会 (Japanese Garden Society of Oregon: 以下協会) が運営するポートランド日本庭園は、庭園着工から現在に至るまでの間、庭園築造と維持管理・運営管理において一貫して日本人造園家と関わりを持ってきた。この制度はディレクターシステム¹⁾と呼ばれ、1964年以来、初代(庭園)ディレクター平欣也を初めとして、ほぼ3年ごとに若い造園家が入れ換わりながらも継続して在駐し、1991年まで現地の人々と協働して日本庭園を造り上げた。このように日本人庭園技術者が長期間関与したため、結果的に庭園の陳腐化、無国籍化を回避し、本格的な日本庭園を実現することができた。

また、その際の築庭技術や剪定などの庭園技術を現地スタッフらに指導するなど総合的な庭園技術の伝達を図ると共に、日本庭園の持つ美意識、価値観、思想性などへの理解の促進と日本庭園文化の啓蒙にも大きく貢献した。その評価の一端はThe New York Times (29.Sep.02) で大きく掲載され、1996年に出版された Human Nature²⁾ に詳しく見ることができる。

さらに、この制度は1991年の庭園完成以後、現地に留まったディレクターOBによりコンサルタント業務でスタッフへのアドバイスや各種技術の下支えとして2008年まで実質的に継続することになった。

2008年、ディレクターシステムは新たに庭園学芸員 (Garden Curator) を誕生させた。庭園学芸員は、海外における日本庭園のあるべき姿とポートランド庭園の将来を重ね合わせた総合的見地から Facilitate, Educate, Communicate に関するソフト、ハード両面の充実を打ち出す一方、北米における日本庭園の国際ネットワーク化のための広域的活動組織 (North American Japanese Garden Initiative) 設立を鑑み、情報共有のための発信システム、日米技術者相互の交流や技術者養成体制の確立及び教育プログラムの早期実現に向けて動き出した。

2010年6月、歴代ディレクターが名を連ねるディレクター会 (Directors Council) が設立され、いままでの海外経験を踏まえた庭園の築造や管理などさまざまな知見を通してポートランド日本庭園への全面支援を表明した。

加えて、北米小都市の一庭園で、しかも50年もの長い時間をかけて実践されたツクル、ツタエル、マモル、ミガク、ツナグなど日本庭園が異国の地で存続するための知恵とその美空間の体系の全容が、2010年10月に開催された協会主催のディレクターの集い (Garden Directors Reunion) で整理され、後日、情報発信される予定である。これにより今まで築造されてきた国内外の日本庭園の持続性の問題や、今後つくられる庭園の形成プロセスに大きな示唆を与えることが期待される。

2. ポートランド日本庭園の概要

戦後15年を経た1960年頃、米国オレゴン州ポートランド市に日米両国の友好と親善の場として日系人会や地元市民らの中で日本庭園築造の機運が高まり、63年には正式にオレゴン日本庭園協会が設立された。設計者には当時、北米中心に活躍していたコーネル大学造園科出身の日本人造園家・戸野琢磨(1891-1985)が選ばれた。

同市の町中から約1.0km西方のワシントン公園内につくられた面積約2.2ha (5.5acre) の庭園は、平庭、石庭、茶庭、池泉廻遊庭、そして自然庭の5つの時代形式が地形の起伏に合わせて有機的に配置されている。

運営は理事会(27名)が行い、日常の業務は組織的に役割分担



写真-1 戸野琢磨²⁾



写真-2 石庭

* 株式会社 要松園コーポレーション

** オレゴン日本庭園協会

* Yoshoen Corporation Co.,Ltd.

** Japanese Garden Society of Oregon

され、経理・会計、会員統括、マーケティング・渉外、入園管理、庭園の管理スタッフ、売店・行事、学芸員（庭園と文化・芸術）など全 38 名で、ボランティア 120 名がこれを支えている。年間入園者数は約 25 万人、年間予算は 330 万ドル（収入 332.3 万ドル/支出 320.3 万ドル：2009 年度）。園内では、年間を通じて端午の節句や七夕など日本の伝統行事や文化・美術展（年 4 回）、ガーデンレクチャーシリーズ（年 6 回）、コンサート、庭園講座、公開茶会・生け花展、地元アーティストのクラフト展示販売などが随時開催され、このほかボランティアによる庭園ガイドツアーや小・中学生のための環境学習も行われている。

3. ディレクターシステム

ディレクターシステムが誕生した主な要因は、①日本庭園は日本人の自然観や精神性と深く関わり、築造には日本人の巧みな意匠表現や施工技術が不可欠との戸野の庭園観が強く影響した。また、②「日本庭園は日本人の手で…」との現地人らの強い意志が働いたことや、③一気に築庭する財源がなく長期的にならざるを得なかった、④就労ビザ取得で 3 年間の就労が可能になったなどがあり、システムが定着した理由として、①専門教育を受けた有能な技術者の推薦があった、②大半が 20 代の若い技術者であり、割合、低賃金で雇用できた、③地域に溶け込み良好な人間関係を構築した、④常に新しい感覚を持ち込み、上質な庭園技術を随所に発揮して期待に応えた、⑤日本人が常駐することで庭園技術、日本文化の直接的な伝達や啓蒙普及にも貢献したことなどが上げられる。

次にディレクターシステムを、各役割を主軸に時代区分して、それぞれ人と経過とその特徴について述べる。



写真-3 平庭



写真-4 左：自然庭、右：池泉廻遊庭

(1) 庭園築造期 (1963~76)

1963 年、庭園設計者・戸野によって現敷地（当時は市営動物園）が選ばれ、戸野は原地形を生かした 4 境（平庭、石庭、茶庭、池泉廻遊庭）を提案した。旧動物園の解体がほぼ終了した 1964 年、戸野の推薦を受けた平欣也が初代ディレクターとして着任した。平は東京農大出身で戸野の教え子でもあり、戸野を心から師と仰ぎ、戸野の「日本庭園を、自然風土と真行草などのデザイン構成、それに神仙思想、蓬莱思想などの内面性（精神性）が育んだ固有性の強い文化空間」との考えを熟知していた。

1968 年、戸野の推薦で 2 代栗栖宝一が着任するが、平、栗栖共に戸野の設計・施工の指導監理下にあり、これまでの戸野の基本計画や庭園デザインを忠実に実現することに邁進した。1973 年、栗栖は離任するが、すでに 80 歳を過ぎていた戸野の契約満了もあり、この頃から戸野に代わって、次第にディレクターが庭園の施工業務全体を総括監理し、徐々に人材雇用の権限や築庭計画についても自由が与えられるようになっていく。

栗栖の後任、榊原八朗は栗栖の同門東京庭苑の出身で小形研三に師事し、その縁で小形の推薦によって 1972 年着任した。榊原は小形の設計理念を基に自然写景の庭園様式を具現化した。いわゆる「雑木の庭」というコンセプトを持ち込み、今までとは違った庭園観を示した。

1974 年榊原が離任し、同年、小形の推薦で和久井道夫が着任した。この頃、既に庭園の主要部分（平庭、石庭、廻遊庭、自然庭）が完成しており、和久井は協会の意向を受けて、自らが描いた設計図を基に茶庭（外露地）の築造に着手し、2 年後に完成させて 1976 年離任した。

(2) 庭園築造・維持管理期 (1977~87)

1977 年、水野雅之が 5 代ディレクターとして着任し、本格的な庭園の維持管理が開始された。水野は庭園委員会（Garden Committee）に「日本庭園に維持管理は最も重要な技術であり、その技術の習得には長年を要する」ことを指摘した。水野は維持管理のため技術者数名を雇用し、松類の剪定、落葉樹・針葉樹の枝抜きなど主要な維持管理技術のトレーニングを自ら率先して実践した。

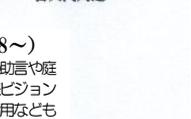
このように築庭から維持管理に軸足を移した背景には、庭園の主要部分が既に完成していたことや長年の建設費支出での財源難があったが、やはり水野の指摘が大きく影響した。そして庭園関係者らに「日本庭園の本質的なこととして樹木の成長を抑制し、どう美的空間に仕立てて保持していくかの維持管理の必要性・重要性」が認識されたことが極めて大きかった。

水野の後を受けて、1982 年着任した佐野吉郎は在任期間中、築庭と管理技術のトレーニングをほぼ半々で行い、財源難から築庭費を極力抑え、デザイン、材料、工法などを創意工夫して茶庭（内露地）を完成させた。

1985 年、協会はポートルランド市の庭園拡張を請け、自然庭園に隣接する約 0.4ha (1.0acre) の庭園用地を取得した。1985 年、佐野の後任、土沼隆雄は自然庭園の設計

者榊原と同様小形の弟子で、雑木の庭の空間構成やディテールをよく理解していた。在任期間、管理技術のトレーニングを行いながらも現地スタッフらと協働して自然庭園を違和感のないように拡張させ完成させた²⁾。

表一 ディレクターの役割と庭園活動における現在までの変容過程 (土沼隆雄作成原図 1999¹⁾ に加筆)

	平也也 (初代 1964~69) 庭園築造期において戸野デザインを忠実に施工。戸野の自覚的見識や書面などの指図的指導のもと現地スタッフらと庭園の基礎を築く。	
	栗栖宥一 (2代 1968-73) 戸野デザインを踏襲しながらも、自らの実務経験や庭園技術を発揮して庭園築造を行う。	
	榊原八朗 (3代 1972~74) ランドデザインは戸野によるが、関わった各所の設計と意匠は自らが引き継ぎ、自然の写実的な作風を紹介するなど古典とは違う現代の風を導入した。	
	和久井道夫 (4代 1974~76) 協会側の意向や要求を踏まえて自ら設計施工で庭園築造を行う。実務面で戸野の影響(指導)が薄らいだため、この頃から自らの判断で庭園を築く。	
	水野雅之 (5代 1977~80) 財源不足の中、築造は榊原愛に委ねて剪定などの維持管理を重点的に行う。現地スタッフらに維持管理技術の伝承を目指し本格的な指導を行う。	
	佐野吉郎 (6代 1982~84) 庭園の改修を担当。会員や庭園愛好者に日本庭園を説明する機会が増える。園内外のイベントに積極的に参加し、加えてスタッフらに維持管理技術を実地指導する。	
	土沼隆雄 (7代 1985~87) 敷地は狭く、自らが設計、施工し庭園築造技術の伝承や維持管理の指導継続を行う。園外の庭園築造(催し)と各種講習会も積極的に開催する。	
	田中徹 (8代 1988~91) 庭園改修及び新たに必要工事を担当し、自らの設計施工で行うなど庭園の集大成をはかる。引き続き維持管理施工の技術面の伝承力を入れる。	
	内山貞文 (初代庭園学芸員 2008~) 庭園が最も美しい状態を保つための技術の助言や庭園のあるべき姿を注意深く見守り、将来ビジョンを描いている。最もふさわしい庭園の活用なども企画運営。	

(3) 維持管理・庭園修復期 (1988~91)

1988年、小形の推薦で着任した田中徹は、維持管理技術のトレーニングのほか、ほぼ完成していた庭園全体を俯瞰して、垣根の新設や石積み崩壊の修復、枯損樹の植え替えなどを行う一方、来園者のための新たな園路の設置や身体障害者法(ADA)に添った園路改修など、庭園を磨き上げることに力を注ぎ1991年離任した。8代田中をもって庭園の形が完成したことから、協会はこれ以後、日本からの庭園技術者招聘を終了した。

(4) コンサルタント期 (1992~2007)

協会は、十数年に及ぶ維持管理技術のトレーニングでほぼ管理技術者が養成されたとの認識から、以後、Michel Kondo 技術主任による年間管理プログラムで現地人スタッフによる庭園の維持管理作業が開始された。作業は大きく樹木管理と地被管理に分かれ、病害虫対策は協同作業で行われ、各責任者を配置して主体的に継続された。

水野、田中はそのまま米国に留まり、コンサルタントの委嘱を受けて、引き続き庭園管理や補修の助言を行い、かつ理事会でたびたび用と景の調和性や自然の形象などを技術者の視点から、解説を交え日本庭園理解を促した。

(5) 庭園学芸員期 (2008~)

海外日本庭園は社会的情勢やその時代の要請、各国の習慣、自然的背景や地域性、庭園材料、技術、美意識などの多因的成立であるため、どうしてもこれらを包括的に理解する人材が必要である。内山貞文は2008年庭園学芸員に着任し、以上の点から継承(庭園のデザインと技術を現地の次世代に繋ぐ)と進化(生きた庭園として時代や人と庭園を多様な形で結ぶ)を自らの役目とした。

表二 庭園学芸員の主な仕事

主要項目	内容
調整 Facilitate	<ul style="list-style-type: none"> 庭園管理スタッフ、庭園委員会(GRC)、施設委員会(PPC)との意見交換の活発化と庭園の維持管理に関して、特に現場で発生する専門的案件については議論の内容を容易にして解決に導く 庭園の修復においては微細なものであっても、その全容(場所・理由・材料・工法・施工プロセス等)を記録し、かつ責任の所在を明確化する 維持管理や修復の困難な問題は専門家を要請する 芸術的観点から庭園の意匠を保全し管理する 維持管理は計画に添い、調整しながら進める 可能な限り庭園管理スタッフと作業を行い、レクチャーを通して作業全般に質の向上を目指す
教育 Educate	<ul style="list-style-type: none"> 庭園管理スタッフの技術向上のため、専門家を招聘した講習や日本への技能研修制度をつくる 教育委員会と文化・教育学芸員と共同でガイドトレーニングのマニュアル作成とその実施を行う 理事会への出席と庭園全般の理解に繋がる前向きな話題とその資料を提供する 庭園の本質に鑑み、一貫した庭園観を主張する さまざまな場面で庭園議論の内容解説などを行い、深く掘り下げて進行するように配慮する
情報伝達 Communicate	<ul style="list-style-type: none"> メディアへの対応を積極的に行う 動向の情報公開を行い、ウェブサイトを利用してブログにさまざまな話題を提供する 一般市民に対する庭園理解に努め、わかりやすい庭園のレクチャーなどを計画して実行する 日米両国語でトピックな話題を市民に提供する

以上まとめると、初期においては、①長期的築庭活動による緻密な庭園形成、②日本庭園・日本文化の理解に貢献、③庭園の物理的変化と市民の要求に対応、④管理技術の構築・伝承が大きい。1991年以降、ディレクターはコンサルタントとして後方支援に廻り協会自立を促し、2008年、ディレクターシステムは世界に先駆けて庭園学芸員を誕生させ、新たな庭園の継承と進化を目標に、現

代社会の中で生き続ける日本庭園を目指すこととなった。

協会は、これら歴史の詳細を直接市民に紹介するため2010年10月、初めて歴代ディレクター全員をポートランドに招待し、3日間、ディレクターの集いを開催した。

集いでは、①過去各ディレクターの足跡を辿り、その業績を解説する：パネルディスカッション、②過去から未来へ庭園関係者を中心に庭園の将来像を展望する：レセプション、③未来への第一歩庭園を廻りながら現地スタッフやボランティア達との現場サイドの意見交換：フリートークが行われ、各人の庭園観についてもインタビューがなされた。この全容はドキュメンタリーフィルムに記録され全世界に発信される計画である。

4. 庭園を核とした国際交流

海外の日本庭園は、戦後以降、あらためて両国の友好関係の絆や文化交流の場として活発に築造されるようになり、その多くが市民に公開されている。

しかし、近年、それらの継続維持の難しさに直面している。その問題として、①美的空間として日本庭園そのものをとらえる価値意識の低下とその評価のあいまいさ、②管理運営を行う組織体制の不備、③「変化する」という庭園の避けがたい特質を起点にした的確で継続的な維持管理技術とその養成システムの未開発、④社会との結びつきや文化交流の場の意義の消失や財源確保の難しさなどが上げられる。

これらについては、もはや一日本庭園のみの問題ではなく、それぞれ場所や規模を超えて国内外の庭園に共通する緊急かつ重要な問題との認識から、内山はポートランド日本庭園のこれまでの築庭過程で構築された組織や制度、管理運営上の特徴やさまざまな活動を踏まえて、日本庭園の広域的ネットワーク化に着手した。

表-3 日本庭園の共通問題・課題

- 日本庭園の価値
 - ・美的価値、人間らしさを支える価値
 - ・歴史・文化的・経済的価値
 - ・学術的価値などとその位置づけ
- 管理運営
 - ・管理運営組織（人、金、仕組み）
 - ・利活用（利用サービス、物、心、仕掛）
- 維持管理
 - ・日本庭園の空間構成と形の管理維持
 - ・庭園修復（概念、社会的背景、地域性、人、技術、材料、美意識、歴史観）
 - ・維持管理技術の開発、向上と伝承
- 文化交流
 - ・現地の日本庭園（人）同士の交流
 - ・日本との交流、世界との交流
 - ・情報発信（システム）の目的と方法
- 社会との結びつき
 - ・高齢社会における日本庭園の在り方
 - ・広範な教育と日本庭園の役割
 - ・人と庭園（人と庭園との関係の本質）

(1) 北米日本庭園活動組織 (North American Japanese Garden Initiative) の設立に向けて

海外の日本庭園が持つ共通の問題・課題（表-3）を解決に導くため、それぞれに関わる専門分野の役割強化と庭園相互の情報交換ネットワーク化を目指す。初期目標で北米日本庭園連絡協議会の設立を構想している（表-4）。

ポートランド日本庭園を米国における情報収集の中心で、かつ技術や運営を学ぶ基地とする内山、土沼らの「Hub」構想を具現化すべく、Stephen D. Bloom は園長

就任後、各地域の庭園相互の関係理解やその橋渡しを試みるなど持ち前の牽引力でリーダーシップを発揮した。

この活動内容では、①情報のネットワーク化（実践と効果、評価と結果などの「見える化」を実践）、②技術者養成プログラムの確立、③研修・奨学制度や広範な教育制度（例：単位制による大学院編入）の確立を上げている。

表-4 北米日本庭園活動組織の目標

- 初期目標： North American Japanese Garden Association（北米日本庭園連絡協議会）の設立
- 中期目標： North American Japanese Garden Institute（北米日本庭園協議会）の設立
- 長期目標： North American Japanese Garden Research Center（北米日本庭園リサーチセンター）の設立

(2) 合同会議の開催と北米日本庭園連絡協議会の設立

協会は、国際交流基金と日米財団から活動資金の援助を受け、まずは、初期目標の北米日本庭園連絡協議会の設立を念頭にポートランド日本庭園とカリフォルニア州立大学ロングビーチ校との共催で第1回合同会議を東京で開催した（2010年3月）。

ここでは初期（3カ年）活動の前提となる北米各庭園の現状や課題の報告のあと、①北米における日本庭園の実態調査（課題、運営形態などの把握）の実施や、②米国内の庭園同士、または日米両国間の庭園を通じた人や業界とのネットワーク構築の問題などを議論し、日本、米国、カナダの日本庭園関係者、研究者19名が参加した。

今後における取り組みの優先順位として、①情報交換ネットワークの構築、②広報活動の充実、③技術交流プログラムの整備、④継続的に維持するためのビジネスモデルの整備などの方向が示された⁴⁾。これを受け米国内で地域のリーダー会議が開かれ、10月のサンディエゴでの合同会議で北米日本庭園連絡協議会の発足が正式に承認された。このように、協会は自らの庭園はもとより広範な地域の庭園事情にも目を向け、その一歩を踏み出した。

5. おわりに

ディレクターの集いで、歴代ディレクターは庭園を通じた日米両国の相互理解と友好親善に大きく寄与した功績から、在ポートランド総領事館とポートランド市から表彰を受けた。国際交流を根幹とするこの一連の庭園活動の裏には、半世紀に及ぶディレクターシステムを支えたポートランド市民の「民度」の高さがあり、加えてディレクターらの長期間継続的にポートランド日本庭園に向けられた熱い思いがあったことを一言附しておきたい。

参考文献

- 1) 土沼隆雄・鈴木誠：ポートランド市ワシントンパーク日本庭園の形成過程の特徴に関する考察：日本建築学会（1999）
- 2) Hamilton Bruce T：Human Nature：JGSO（1996）
- 3) 環境緑化新聞 第653号（2010）

名称：ポートランド日本庭園 (Portland Japanese Garden)
所在地：611 SW Kingston Ave, Portland, Oregon 97205 USA

